

《講演会報告3》 2005年10月29日(土)

浄土真宗における人間観・仏教観

ファン ティ トゥ ジャン
Pham Thi Thu Giang*

僧侶の妻帯は日本の社会において常識になっており、研究者の関心も希薄なようであるが、なぜ僧侶が出家しても世俗の風儀を断絶しなくなったのか。妻帯という日本仏教の独自性をどう見るべきなのか、仏教の禁欲戒律と僧侶の本来の人間性との矛盾が日本仏教にどのように解決されてきたのかという問題は非常に興味深い。従来は妻帯が破戒とされる行為、あるいはその実情だけに言及され、思想的面においては研究されてこなかった。日本仏教において公的に女犯を弁明したのはいうまでもなく親鸞であるが、近世になって西本願寺の学寮の能化である西吟(1605~1663)などが肉食妻帯論を自ら立ち上げて、公然と議論し、幕府も肉食妻帯を真宗の独自の風儀として容認したのはそれほど知られていないようである。したがって妻帯という問題を正面から検討し、真宗の女犯、妻帯論の思想的特徴とその背後に潜んでいる人間観・仏教観を手がかりとして考察し、妻帯というものが真宗の独自の風儀として日本仏教の普遍的なものへ転換する経緯を探求して、そこから日本仏教にとって人間とは何か、仏教とは何か、それらの本質に迫りたいと思う。

古天台の「即身成仏」論は凡夫の成仏を容認するが、誰でも可能なものではなく、特別な能力が必要であるという。それは日本仏教思想にとって非常に重要な論点で、後に大きく展開されてきた。源信(942~1017)は、「即身成仏」思想を土台として『往生要集』のなかに一般的

衆生の往生について議論し、「往生の業 念仏ヲ本トス」と宣言し、往生には念仏に及ぶ修行はないと主張した。念仏というのは煩惱に満ちた凡夫のための即身成仏の実践方法であるという観点は源信にしてはじめて展開されたものであった。それは法然と親鸞の思想の形成に決定的影響を与えたといってもよいであろう。しかしここで単なる影響ではなく、親鸞が内面的苦悩から源信・法然をはじめ従来の仏教思想をどのように取り入れ、展開させていったのかという問題に注目したいと思う。

親鸞の人間観についていえば、法然の「平等」思想から親鸞はすべての人間は平等に悪人であって、破戒、持戒関係なく、大切なのは悪人であることを自覚することであると悪人正機説のなかに展開した。善人が往生できるならば、当然悪人も往生できる。人間は皆煩惱具足の凡夫であるため、自力できない。だからこそ信心をこめて念仏して阿弥陀仏の救済力にすがら。このように親鸞は人間の本質と限界を深く認識し、凡夫のため救済の道を探究した。もっとも注目すべきは親鸞の「女犯偈」である。「女犯」は僧侶の「宿報」であり、逃れられないものであるため、救世菩薩が「玉女」になって、女犯させ、往生させる。ここで僧侶の人間性を発見したということが、親鸞の思想を理解するには非常に重要な観点である。親鸞は自らの悩みから僧侶の苦悩を解放する道へ辿り着いた。また親鸞は自ら愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷うと自覚することによって、親鸞も凡夫であるということに気付いた瞬間に、日本仏教思想

*奈良女子大学人間文化研究科比較文化学専攻
博士後期課程在籍

史が革新的な瞬間を迎えたといっても過言ではない。親鸞は「非僧非俗」思想で仏教的世界と世俗の世界の断絶を否定し、親鸞と凡夫を合体することによって、親鸞が衆生を自分のように理解し、救済の道を探究するようになり、その寛容な人間観から革新的な仏教観を導いた。

近世になって、真宗の学僧達も親鸞の思想、特に「女犯偈」にみられる寛容で解放的人間観を受け継いで、自分なり、時代に応じて肉食妻帯論を提唱した。真宗の妻帯を厳しく批判した民衆、他の宗派、他の学問の知識人に対して、本願寺学寮の第二代の能化である西吟をはじめ、知空や慧空などが反論して、肉食妻帯論を公的に議論した。西吟は人間の欲望を積極的に認め、僧侶に妻帯を与える必要があり、妻帯は外在的肉食妻帯にあるのではなく、内在的な慈悲のありようがあると述べた。そこから僧侶でも「人トシテ」人間の道徳、世俗の倫理を守るべきであり、仏教的夫婦の道があると提言した。しかも肉食妻帯は「化導ノ方便」として議論され、

「和光同塵」によって僧侶が世俗の人々と同じように飲食し、妻帯し、彼らに近づいて布教する方便であると西吟は述べた。そこで僧侶の欲望問題が解決されると同時に、民衆を救済する道も開かれた。西吟の議論に対して批判も起こり、その中でも最も猛烈に批判したのは黄檗宗の鉄眼であったが、それは伝統的仏教の考え方であって、鉄眼の独自の議論は見られなかった。

このように思想的面からみれば、妻帯論には寛容な人間観と革新的な仏教観が潜んでいるということが明らかになった。親鸞の思想は日本仏教の中でこそ生まれてきたものと考えられる。親鸞は自らの苦悩と衆生の煩惱に対する理解から、日本の中世仏教の現状と思想に反発しながら、継承して、「凡夫」のための新たな仏教を作り出した。その人間観と仏教観は近世の肉食妻帯論に説得力をもたらし、民衆にとって真宗の魅力であり、真宗教団の発展の根源であると考えられる。